



長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM

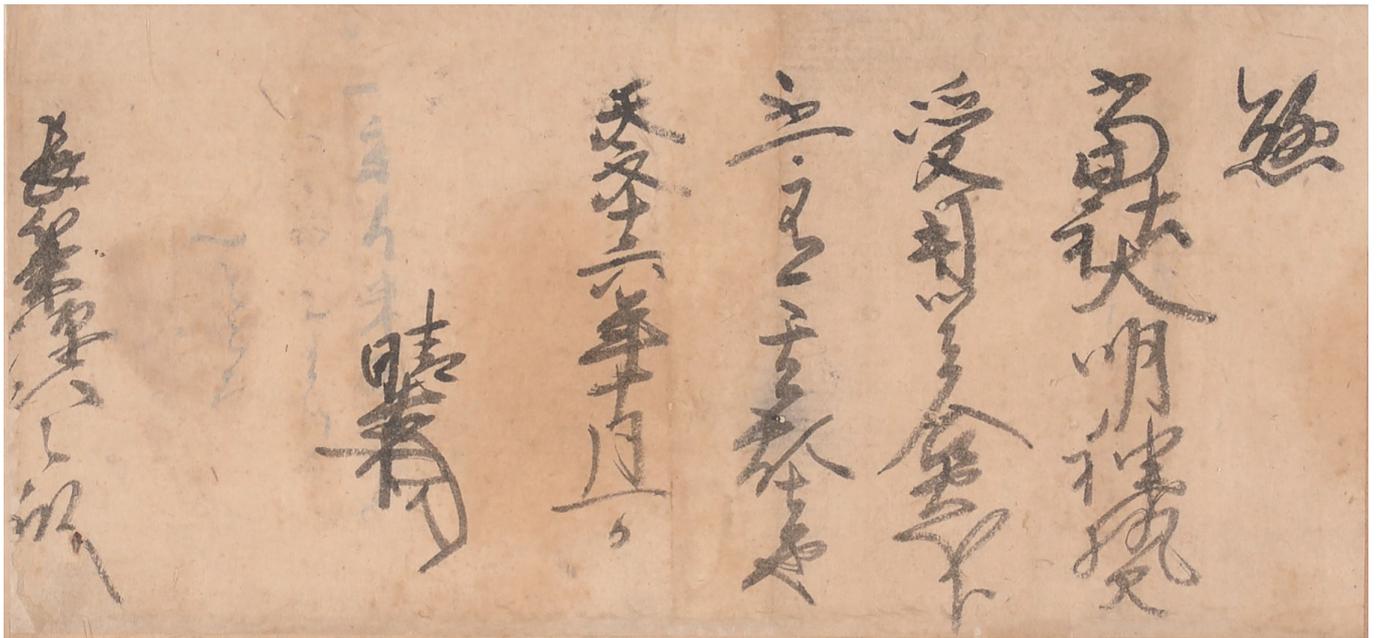


博物館だより

Nagano City Museum

第136号

諏訪晴長判物（「町田礼助氏所蔵文書」収録）の紹介



口絵 天文16年(1547)10月1日付 諏訪晴長判物（「町田礼助氏所蔵文書」、【文書12】）

はじめに

長野市立博物館には、平成7年（1995）に寄託を受けた「川中島今井町田佑幸氏寄託資料」があります。寄託者の祖父は町田禮助氏という人物で、八十二銀行の重役などをつとめた名望家である一方、信濃郷土史研究会の設立に尽力した郷土史家でもありました⁽¹⁾。

寄託資料には、卷子や書状など計11点をおさめた木箱が含まれています（写真1）。この木箱におさめられている資料を「町田礼助氏所蔵文書」と呼んでいます。

収蔵品調査のなかで、このうちの卷子1点に諏訪社の祭礼に関わる文書が含まれていることがわかりました。今回はこの文書について紹介します。

1. 「町田礼助氏所蔵文書」の卷子について

木箱の資料を見る限り、町田氏は郷土史研究をしていくうえで、古文書などの資料を収集していたと考えられます。それらの収集資料の中には、戦国時代にさかのぼる文書も確認されます。

「町田礼助氏所蔵文書」のうち、九曜紋が施された表装の卷子（九曜紋付卷子、写真1）には、16点の文書が図1のように貼り交ぜられています。16点の構成は表1の通りです。

表1では16点の文書について、年月日、題、形態、法量(cm)を示しました。

これらの文書のうち、文書1・2・6・9・12の6点には、裏面にも書き込みがあり、文書5・15の2点には別の文書の文字が移ってしまっています（写真2）。したがって、これらの文書群は元々重要な史料として保存されていたわけではなく、裏紙などとして利用された可能性があります。そのため、人為的に加工された形跡がみられ、文書の前半部分や下部が欠損してしまっているものもあります。



写真1 町田礼助氏所蔵文書・木箱（今回紹介するものは、左下部から二つ目の卷子）

図1 「町田礼助氏所蔵文書」（九曜紋付卷子）の配置

16	14	12	11	9		7	6	5	4	3	2	1
	15	13		10	8							

・卷子に収録されている文書について、右から順番に番号を振った。

表1 「町田礼助氏所蔵文書」(九曜紋付卷子)の構成

	年	西暦	月日	題	形態	法量 (cm)	収録史料集
1	天文12年	1543	4月吉日	片山入道常範カ譲状	竪紙	縦24.4、横39.5	『加能史料』戦国XI
2			9月3日	松崎入道郷全書状	竪継紙 (中折)	縦23.3、横50.8	
3			11月10日	山門三院別当代執行代連署書状	切紙	縦16.9、横37.2	
4			10月10日	某書状	竪切紙 (元は竪紙か)	縦20.7、横19.2	
5			4月10日	清誉書状	切紙	縦15.2、横39.5	
6			11月17日	某書状	竪切紙 (元は竪紙か)	縦23.5、横22.8	
7	(天文22年)	1553	閏正月17日	某宗重書状	切紙	縦10.8、横32.8	『戦国遺文』三好氏編2114号
8			正月24日	三宅一郎兵衛カ書状	切紙	縦11.2、横40.1	
9	(天文18年)	1549	3月13日	松永久秀書状	切継紙 (元は折紙か)	縦11.4、横53.7	『戦国遺文』三好氏編1761号
10	(弘治3年)	1557	11月9日	筒井順慶書状	切紙	縦13.2、横35.8	『戦国遺文』三好氏編494号
11			6月20日	某書状	切紙	縦15.5、横20.5	
12	天文16年	1547	10月1日	諏訪晴長判物	切紙	縦11.8、横25	
13			10月19日	松田藤弘書状	切紙	縦12.8、横25	
14			11月24日	某書状	切紙 (元は竪紙・中折か)	縦11.5、横40.8	
15			5月16日	某書状	切紙	縦11.2、横32.5	
16			7月16日	某社関係書状	切紙 (元は切継紙か)	縦15.3、横33.7	

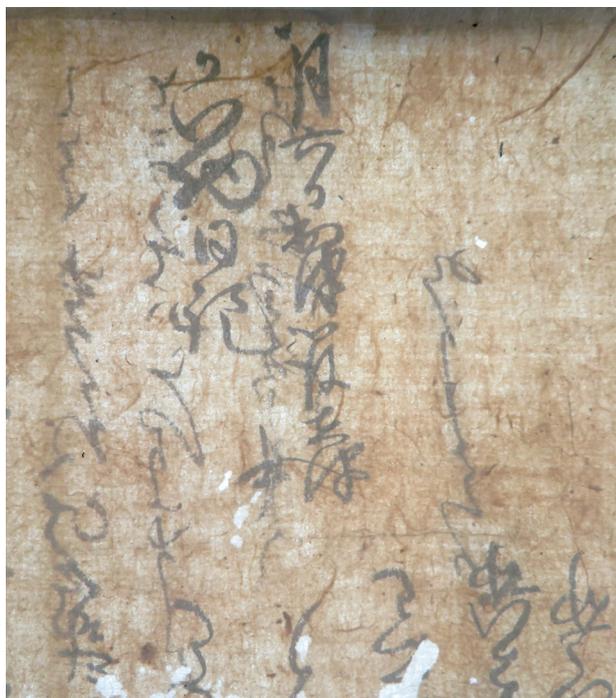


写真2 【文書2】の裏面

2. これまでの調査

町田氏は昭和14年(1939)1月19日に、京都帝国大学文学部(現京都大学)国

史研究室へ文書調査の依頼をしています。ここで、依頼を請け負ったのは、当時、京都帝国大学で助教授をつとめていた、中村直勝氏でした⁽²⁾。中村氏は中世を中心とする社会史・文化史の研究や、古文書・古記録の実証的な研究を行っていました。

「町田礼助氏所蔵文書」(「陳者先般本學中村助教授宛送附被下候文書 一卷」)について中村氏は、今後の研究の参考になると評価しました。ただし、中村氏は多忙なためか、卷子について詳しく調べる時間がなかったと手紙に記しています。

町田氏が収集した卷子は九曜紋付卷子の他、2点ほどありますが、戦国時代の古文書が貼り付けてある卷子は九曜紋付卷子のみです。よって調査された「文書 一卷」は、九曜紋付卷子とみてよいでしょう。

国史研究室からの返事(写真3)に、「文書 一卷」と記されていることや、東

京大史料編纂所の影写本（昭和10年作成⁽³⁾）も、卷子と同じレイアウトで作成されていることから、昭和10年（1935）より前には、卷子装になっていたと想定されます。

また、16点の文書のうち、文書1・7・9・10の4点については、『加能史料』や『戦国遺文』といった史料集に翻刻されています⁽⁴⁾。これにより、文書の調査がなされ、戦国時代に作成された史料として既に評価されているものもあります。

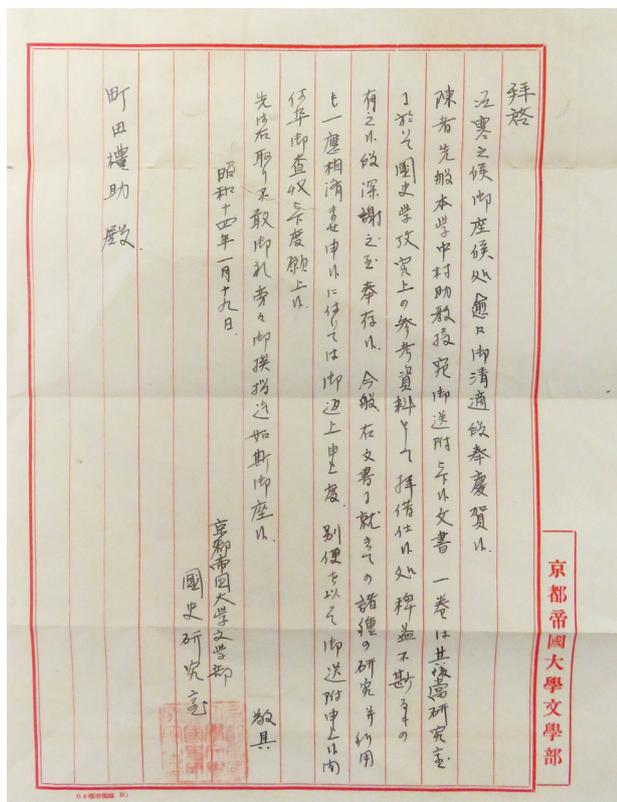


写真3 京都帝国大学文学部国史研究室から町田禮助氏への返事（長野市立博物館蔵「町田礼助氏所蔵文書」）

3. 諏訪晴長判物（【文書12】）と諏訪晴長判物に 関係する文書（【文書11】）について

九曜紋付卷子におさめられている16点の文書のうち、今回は諏訪信仰のことが記されている1点（【文書12】）と、それに関係する1点（【文書11】）の、計2点について紹介します。

【文書12】の差出人は「晴長（花押）」となっており、花押と署名により諏訪晴長と

いう人物に比定できます⁽⁵⁾。

晴長は足利尊氏の右筆として活躍した諏訪円忠を祖先にもつ⁽⁶⁾、京都諏訪氏本宗家の出身です。晴長の祖先である円忠は、諏訪大明神を信仰しており、信濃にゆかりのある人物でした。

晴長は室町幕府の奉行人として、天文4年（1535）以前に登用され、元龜3年（1572）頃まで活動した人物です。寺社関係の奉行としても活動し、安居院（飛鳥寺）などを担当していました。

【文書12】 諏訪晴長判物

本紙11.8×25.0cm、切紙（口絵）

〔以下翻刻〕

懸

当社大明神贄

受用堅^{〔慳〕}貪申候、

不可有言散者也

天文十六年十月一日

（諏訪晴長）
晴長（花押）

長束源次郎殿

【文書12】の冒頭にある「当社大明神」とは、京都の諏訪社のことだと考えられます。晴長をはじめとする諏訪氏は京に居住し（京都諏訪氏）、京都諏訪社の神官もつとめていました⁽⁷⁾。また、「懸当社大明神贄受用堅^{〔慳〕}貪申候、不可有言散者也」として、「贄」をかかげ受用する方法について「堅貪（慳貪）」（教授することを物惜しみしたところ）ではあるが教授し、その内容について宛名の長束源次郎に言いふらしてはならないと命令しています。

ここでの「贄」とは、おそらく御贄のことを指すと考えられます。御贄は諏訪大社上社（諏訪上社）の祭事である「御頭祭」において、神前に供えられる鹿や鷹などの動物のことです⁽⁸⁾。「御頭祭」では、廊内

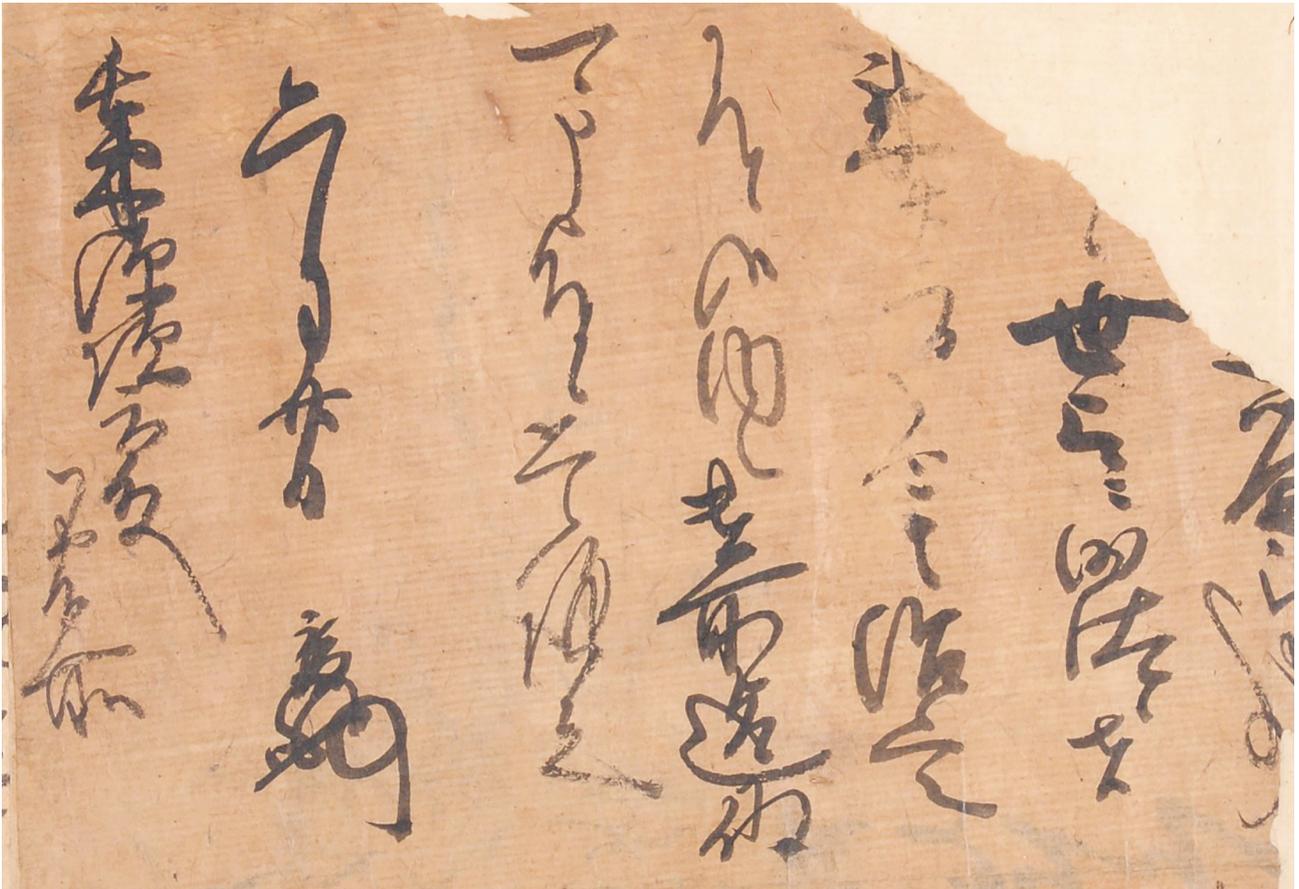


写真4 【文書11】 某書状

の上段に百余個の燈籠を掲げ、鹿の頭75個を神前に供えたといわれています⁽⁹⁾。また、この祭儀では鹿を食べることをならわしとしていました。

京都の諏訪氏は、上社への精神的な紐帯を強く有していたといわれます⁽¹⁰⁾。それゆえ、【文書12】では贄の扱い方について、晴長は諏訪上社の手法を長束に伝授したと考えられます。

ところで、九曜紋付卷子には、【文書12】の宛名である長束源次郎宛のものがもう1通含まれています(【文書11】)。

【文書11】 諏訪晴長判物 本紙15.5×20.5cm、切紙 (写真4)

〔以下翻刻〕

(前欠)

[] □ □ □ 事

[] 世上ニ御仕候者、

□米升有之候へ共、治定

いたし候儀、内々遣所違伺
可申者也、恐々謹言
二月廿日 [] (花押)
長束源次郎殿

御宿所

【文書11】は前半部分が欠損し、破損しているため、文書の内容は明確ではありません。また、差出人の詳細も判明しませんが、宛名は【文書12】と同じ長束であり、【文書11】と【文書12】は関係している可能性が高いと考えられます。

ここで、【文書11・12】の宛名の長束源次郎についてみてみます。推察の参考になるのは、諏訪円忠以来の京都諏訪氏にかかる家領です。

円忠は鎌倉時代末期から南北朝時代初期まで活動した人物です。その子孫たちは室町幕府奉行人を世襲していました⁽¹¹⁾。円忠やその子孫である晴長などの京都諏訪氏は、諏訪上社の大祝(諏訪社のトップ)を世

襲する信濃諏訪氏の傍系にあたります⁽¹²⁾。

円忠は暦応3年(1340)に天竜寺造宮奉行の勲功として、近江国三宅郷内十二里(現滋賀県守山市十二里町)・赤野井村(現守山市赤野井町)の地頭職を得ました⁽¹³⁾。これらの家領は、延徳3年(1491)以降も京都諏訪氏の家領として確認できます⁽¹⁴⁾。また室町後期には、赤野井に土着した諏訪氏がいたとされています⁽¹⁵⁾。

京都諏訪氏の家領である三宅郷内十二里や赤野井の近隣には長束村(現草津市長束町)があります。長束村について、弘治2年(1556)4月20日の本間貞政売券写(「長束文書」⁽¹⁶⁾)によれば、「長束惣田」という田がみえるため、戦国期には存在していた地名であることが確認できます。

また、永正年間(1504~21)には、近江国栗太郡物部村(現守山市)の八幡神社(大門八幡宮)を長束十郎右衛門という人物が修営したという記録が残っています(「同八幡宮社蔵文書」⁽¹⁷⁾)。

これにより、長束村の周辺には、戦国時代に長束を名乗る一族が居住していたことがわかります。【文書11・12】の宛名である源次郎が十郎右衛門の一族であったかどうかはわかりません。ただし、京都諏訪氏の家領周辺に、「長束」という地名や人物が存在していることから、源次郎は京都諏訪氏の家領や長束村に関係していた人物であったと想定されます。

4. 京都諏訪社の祭礼

京都市には現在、下京区すわびらき諏訪開町に諏訪神社(諏訪大社分社、写真5)、同区下諏訪町に尚徳諏訪神社があります。また、以前は中京区東洞院六角下ル御射山町にも諏訪神社があったようです。

京都にある諏訪神社については、諏訪開町の諏訪神社は上社、下諏訪町の尚徳諏訪



写真5 諏訪開町諏訪神社(京都市)

神社は下社といった、長野県における諏訪社の配置に見立てて建立されたといわれています⁽¹⁸⁾。また、御射山町の諏訪神社は諏訪円忠が祀ったものであったとされます。円忠は室町時代初頭の京都において、諏訪上社の勢力を強めていました。

今となっては、詳細がわからないことも多いですが、京都市内にある諏訪神社には、京都諏訪氏に関係する神社もあることから、三社すべて、円忠に関係していた可能性があります。また、円忠は上社の支流を出身とするため、上社に見立てられた諏訪開町の諏訪神社には、深い関係があるのかもしれない。

京都諏訪氏は京都において、信濃国の本社と同様の祭礼を催していました⁽¹⁹⁾。なかでも管領細川氏内衆の丹波上原氏は、京都諏訪社の祭礼に深く関わっていたことがわかっています⁽²⁰⁾。

丹波上原氏は文明19年(1487)6月20日の守矢満実書状案⁽²¹⁾で、上社神長官守矢満実から諏訪社の神秘を伝授することについて記されています。ここで、満実は上原氏に対し、諏訪神秘はたやすく持ち出されるものではないが、上社へ参ったときに神秘を学んでいただきたい、としています。

この神秘とは、諏訪社の秘伝書（諏訪大明神神秘御大事之事）であったと想定されます²²。よって、【文書12】も秘伝書と同様、京都諏訪社が祭礼の方法等を伝授する際は、伝授する相手に対して、秘密であったことを強調しているのではないかと考えられます。これにより、京都諏訪社が信濃国の本社と祭礼の方法を同じように伝授していたことが考えられます。

5. 京都諏訪氏と信濃の関係について

諏訪円忠は埴科郡小坂（現千曲市桑原）を本貫とする、小坂氏の出身であったといわれています²³。京都諏訪氏の人物によって作成された「前田本神氏系図」²⁴によれば、小坂氏は諏訪大明神の氏人を称す、諏訪神党という武士団に属していたといわれます。この諏訪神党に属する武士は「神」という姓を名乗り、そのほとんどが信濃の武士で構成されていました。

円忠は近江国以外にも家領を有しており、越中国領高木村（観応元年2月14日「祇園執行日記」）、信濃国四宮荘北条時顕跡（貞和2年6月18日「諏訪円忠注進状案」天龍寺重書目録）の地頭職を得ていました。

なかでも、四宮荘は現在の長野市篠ノ井近辺に位置し、千曲川西部沖積地から山よりにかけて広がっていた荘園です²⁵。円忠は四宮荘のうち、「北条」、すなわち四宮荘の北部を領有していたことが考えられます。貞和2年（1346）6月18日「諏訪円忠注進状案」にも、長谷寺（現長野市篠ノ井塩崎）といった現在でも残る寺社や地名が記されています²⁶。こうした円忠の家領は、南北朝の内乱などを乗り越え、円忠の子孫たちに相伝されていきました²⁷。

また円忠の子孫は、室町幕府の奉行人として活動がみられます。そのうち、円忠の

玄孫にあたる諏訪忠郷は「信濃守」を官途名（受領名）としていました²⁸。「信濃守」は京都諏訪一族のなかでも、本宗家が名乗る特別な官途名だったと思われ、円忠以来の京都諏訪氏が「信濃」を強く意識していたことがうかがえます。

また円忠は、諏訪大明神を尊崇する念が極めてあつ人物であったとされ²⁹、延文元年（1356）には諏訪大明神に関する絵巻「諏訪大明神絵詞」を完成させています。この「絵詞（画詞とも記す）」は、京都諏訪氏の本宗家が代々備えていたといわれています。ただし、原本の絵巻は江戸時代頃に行方不明となってしまい³⁰、現在は写本を残すのみとなっています。

【文書12】に登場する諏訪晴長は忠郷の系譜を引き、晴長自身も「信濃守」を名乗っていました³¹。晴長もまた、円忠をはじめとする京都諏訪氏の意志を引き継ぐものであったと想定されます。

おわりに

今回は「町田礼助氏所蔵文書」（九曜紋付卷子）の中から諏訪社に関係する2点を紹介しました。

この2点からは、戦国時代に室町幕府奉行人として活躍した京都諏訪氏の晴長と、諏訪社の祭礼の方法について伝授された人物についてみることができました。また、京都諏訪社での祭礼は、信濃国の本社と密接にかかわっていることが見えてきました。

晴長は祭礼の方法について伝授する旨を判物によって発給しており、諏訪上社の御頭祭と関係する「贄」の扱い方を長束という人物に伝授しようとしています。本社でも、祭礼の方法を伝授する事例があります。本社と京都諏訪社の両社は祭礼の方法を伝授する際、秘密にすることを強調しており、共通していることがわかりました。

また京都諏訪氏は円忠の代から、信濃国の諏訪社をあつく信仰していたとされ、その子孫たちも、「信濃守」を名乗ってきました。今回みた史料は、円忠の子孫たちも、信濃を強く意識していたということを補完するものと言えるでしょう。

今回、「町田礼助氏所蔵文書」の中から九

曜紋付巻子を紹介するにあたり、今一度文書の内容を分析した結果、16点のなかから長野県に関係する文書を確認することができました。

「町田礼助氏所蔵文書」については、今回紹介しなかった文書も、引き続き調査・研究を進めていく予定です。（石田将大）

注

- (1) 『長野県の地方史を育てた先学略年譜』(信濃史学会、1974年、米山一政執筆)
- (2) 『国史大辞典』第10巻(吉川弘文館、1989年、熱田公執筆)、昭和2年(1927)から同23年(1948)に公職追放で退官するまで、京都帝国大学で助教授をつとめた。
- (3) 影写本の末尾には、「右町田禮助氏所蔵文書 長野縣更級郡中津村 町田禮助氏所蔵 昭和十年七月影寫了」と記されている。
- (4) 文書1は、加能史料編纂委員会編『加能史料』戦国Ⅻ(石川県、2013年)、文書7・9は、天野忠幸編『戦国遺文』三好氏編第三巻(東京堂出版、2015年)、文書10は同編『戦国遺文』三好氏編第一巻(東京堂出版、2013年)。
- (5) 花押については、東京大学史料編纂所データベースで確認した(2025年12月時点)。
- (6) 林讓「諏訪大進房円忠とその筆跡—室町幕府奉行人の一奇跡—」(皆川完一編『古代中世史料学研究』下、吉川弘文館、1998年)、上島有『中世花押の謎を解く—足利将軍家とその花押—』(山川出版社、2004年)
- (7) 村石正行「室町幕府奉行人諏訪氏の基礎的考察」(『長野県立歴史館研究紀要』第11号、2005年)
- (8) 宮坂寛美「諏訪信仰についての一考察—諏訪大社(上社)の御頭祭にかかわりあいながら—」(『信濃』第50巻 第4号、信濃史学会、1998年)、内山大介「御射山祭りの伝播とその性格—「送る」祭祀としての御射山祭り—(上)」(『信濃』第59巻 第4号、信濃史学会、2007年)
- (9) 三輪盤根『諏訪大社』(学生社、1978年)
- (10) 注7に同じ
- (11) 伊藤富雄「諏訪円忠の研究」(『伊藤富雄著作集』一、永井企画出版、1978年)
- (12) 『諏訪史』第3巻(諏訪教育会、1954年、宝月圭吾執筆部分)、小林計一郎「諏訪氏と神党」(『信濃中世史考』吉川弘文館、1982年、所収)
- (13) 暦応3年8月12日「足利直義下文案」(『臨川寺重書案文』)
- (14) 『蔭涼軒日録』延徳3年11月日条
- (15) 諏訪安茂氏蔵「諏訪系図」
- (16) 滋賀県市町村沿革史編さん委員会編『滋賀県市町村沿革史』第1巻(総論)(弘文堂書店、1988年)では、滋賀県草津市長束の文書であるとしつつも、所蔵者を記していない。
- (17) 『近江栗太郡志』巻4(滋賀県栗太郡役所、1926年)
- (18) 金子典美「諏訪御本地縁起の写本と系統」(同『諏訪信仰史』「御射山祭の史的背景」名著出版、1982年)
- (19) 注7に同じ
- (20) 村石正行「細川内衆丹波上原氏と諏訪信仰—諏訪同盟氏族の一族分業論—」(二本松康宏編『諏訪信仰の歴史と伝承』三弥井書店、2019年)
- (21) 「守矢文書」(信濃史料刊行会編『信濃史料』第9巻、385頁、1957年に収録、以下『信濃史料』と略す)
- (22) 「守矢文書」(『信濃史料』第9巻、386～409頁)
- (23) 注12小林氏論文に同じ
- (24) 尊経閣文庫所蔵
- (25) 湯本軍一「信濃国における北条氏所領」(『信濃』第24巻 第10号、1972年)
- (26) 長野市誌編さん委員会編『長野市誌』第2巻 歴史編 原始・古代・中世、第1章第3節1項「北信濃の荘園と御厨」(長野市、2000年、井原今朝男執筆)
- (27) 注7に同じ
- (28) 注7に同じ、「室町家御内書案」(『改定 史籍集覧』第27冊)
- (29) 注12小林氏論文に同じ
- (30) 石井裕一郎「『諏訪大明神絵詞』成立についての試論—室町幕府奉行人諏訪円忠の絵巻制作—」(二本松康宏編『諏訪信仰の歴史と伝承』三弥井書店、2019年)
- (31) 注7に同じ

博物館だより 第136号 発行日2025年12月26日

長野市立博物館
〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
<https://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

鬼無里ふるさと資料館
〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館
〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500